



一般社団法人

日本小児看護学会

Japanese Society of Child Health Nursing

News Letter

日本小児看護学会 第28回学術集会を終えて

奈良間 美保
(名古屋大学大学院医学系研究科
看護学専攻)

平成30年度7月21、22日に名古屋国際会議場において、日本小児看護学会第28回学術集会を開催いたしました。猛暑の中、全国から二千名を超える方々が本学術集会に参加してくださいました。ご参加いただいた皆様に心よりお礼申し上げます。

小児医療の進歩とその提供体制の整備が推し進められる中で、改めて子どもと家族が主体であること、看護がともにあることの意味について皆様とともに考えたいという思いから、本学術集会のテーマは「子ども、家族とともにある看護」といたしました。

特別講演1は、絵本作家の宮西達也先生に、「ニャーゴのやさしさ・ティラノのおもいやり」というテーマでご講演いただきました。宮西先生の心温まる絵本の世界に引き込まれ「気持ちが動く」ことの心地よさを感じていただけたのではないかと思います。特別講演2は、倫理学者であり武道家の内田樹先生に、「『修行と葛藤』-生きる知恵と力を高めるために-」というテーマでご講演いただきました。内田先生の語りには、生きる主体として子どもをとらえるからこそ見いだされる現代の教育や社会に対する鋭いメッセージが込められていました。世の中で起きている出来事の意味は一つではないことにも改めて気づかされました。

シンポジウムは、「子ども、家族とともにある医療-視点がかわれば、医療がかわる!？」をテーマに、医療の中で起きている疑問や矛盾を共有することから始まりました。佐々木美和氏(チャイルド・ライフ・スペシャリスト)、三輪富士代氏(看護師)、笹月桃子氏(小児科医師)にご登壇いただき、日頃の実践活動の中で大切にされている視点をお話いただきました。子どもにたくさん頑張らせているかもしれないという感覚、医療やケアは誰のため?何のため?を思考し続ける姿勢は、時には医療者に葛藤を生みますが、その一方で「ともにある医療」に一步踏み出す勇気を与えてくれるものでもあったと感じました。今回の学術集会では、新たに親の会との協働企画に取り組みました。子どもたちがその子らしく育ち、自立することについて、ご本人、ご家族と支援者のお立場から大変貴重なご発言をいただきました。親の会との調整から当日の座長まで担っていただいた難病の子ども支援全国ネットワークの福島様のご協力なしにこの企画は成立しなかったと思っています。

本学術集会では、会員の皆様より一般演題を多数ご応募いただきました。子どもや家族の健康支援、或いは健康問題に特有の看護、さらには子どもや家族の体験そのものに関する170演題(口演81題、示説89題)の研究成果が報告され、活発なディスカッ

ションが展開されました。テーマセッションは、年々応募数が増加する傾向にあります。会場等の理由により、全ての方に発表いただくことはできませんでしたが、医療や看護に関連する政策や社会資源、看護技術の最新情報等がとりあげられ、その多くは明日からの看護実践に活用できるニーズの高い話題であったと考えます。

懇親会ではダンサーの志乃舞優さんが特別講演の講師である宮西先生の作品「おまえうまそうだな」の手話ダンスを力強く披露してくださいました。本作品は、学術集会のホームページやポスター、講演集等にも掲載させていただきました。懇親会の会場において、参加者からのサインや写真撮影の要望に長時間快くお応えくださった宮西先生に、只々感謝の気持ちでいっぱいです。

今回の学術集会の参加者は、約半数余りが非会員の方でした。小児病棟に限らず、混合病棟や訪問看護ステーション、福祉施設等からも足を運んでいただき、子どもと家族の看護について議論を深められたことの意義を感じています。

最後になりましたが、学術集会の準備から当日までの間、理事会運営に多大なるご協力をいただきました理事・監事の皆様、細やかな対応をしてくださった実行委員、ボランティアの皆様、そして長期に渡り学術集会の根幹となる企画と運営にご尽力いただきました企画委員の皆様にご心から感謝申し上げます。

▼企画委員の皆さん



▲親の会との協働企画

委員会活動報告 災害対策委員会

- 委員長：浅野 みどり
- 委員：高野 政子、祖父江 育子、内 正子、竹内 幸江、来生 奈巳子、田村 恵美、古橋 知子、山本 真実（事務局）

本委員会は東日本大震災を契機に発足しましたが、近年は地震に限らず、台風による土砂崩れや水害など様々な災害が日本各地で毎年のように発生しています。いったん災害が発生すると、医療現場での対応の難しさはもちろんですが、入院患者さんに限らずお子さんやご家族は災害弱者になりやすく、疾病や障がいを抱えて地域で暮らしているお子さんやご家族への支援はとても重要になります。日頃の災害への備えはますます重要性を増しています。



災害対策委員は各地区の評議員メンバーから構成されており、このような背景の中で地区の特性に応じた身近なネットワーク機能として貢献できることも視野に活動しています。また、評議員による『平常時における災害シミュレーション』を年1回行い、情報伝達や情報集約の訓練を行っています。また、会員のみなさまを対象とした「災害看護研修会」では、できるだけ地域によるアクセスの不公平が生じないように、順番に開催地区を変えて実施し、今年までに全国各地区での研修会を一巡できたところです。近年は様々な地域で自然災害に見舞われていることもあり、災害看護研修会を開催する中で、会員のみなさまの

災害対応への意識や関心が高まっていることを肌で感じています。さらに、災害対策委員会では学会ホームページに災害時や災害の備えに役立つ情報など災害関連情報を掲載し随時アップデートしています。ぜひ、サイトを訪れてみていただき、掲載内容充実に向けた忌憚なきご意見などいただけますと幸いです。今後ともどうぞよろしくをお願いします。



研究奨励賞を受賞して

● 高橋 衣（東京慈恵会医科大学医学部看護学科）

この度、奨励賞をいただきました、東京慈恵会医科大学医学部看護学科 高橋衣です。

選考委員会の皆様、会員の皆様に心より感謝申し上げます。これまで、看護基礎教育における看護倫理教育、子どもの権利擁護を中心に研究をしてまいりました。子どもの権利擁護をテーマとした理由は、看護学の学びと小児看護の臨床経験はもちろんですが、加えて立教大学法学部時代に予防接種法に注目し、歴史的な社会情勢に翻弄される子どもの存在について学んだことが大きなきっかけとなっています。

奨励賞をいただいた論文「小児看護に携わる看護師の子どもの権利擁護実践プロセス」は、看護師として、子どもに携わるようになった卒業生の言葉や実践、あるいは小児看護学実習でのスタッフの方々との場面を共有し話し合っていたことがresearch questionとなりました。小児看護に携わる看護師の子どもの権利擁護を阻んでいるものは何か、実践できるようになるまでにはどのような営みがあり看護師は何をどのように獲得しているのか、実践できるようになるまでの営みは小児看護特有の現象なのか、に注目し研究をスタートしました。課題の特徴からgrounded theoryを用い、結果、コアカテゴリー「子ども中心に考える力」を獲得していく段階的なプロセスが明らかとなりました。

このプロセスには、子どもの権利擁護を実践しようとする看護師を取りまく環境には、医師-看護師関係、先輩-看護師関係、家族-看護師関係という相互作用、日本文化的な物の考え方や受け止め方が

関係していました。加えて、このプロセスは、発展するだけでなく、自分を脅かす対象の前では、瞬時に実践できない状況に陥る構造も明らかとなりました。また、看護師達にとって、子どもの権利擁護を実践しようとする試みは、医療者間の相互作用が、時に外傷体験となり離職を考えるきっかけとなっていました。しかし一方で、自ら子どもの権利擁護を実践する為の方略となる行動をとり、「子ども中心に考える力」を蓄積し、子どもに携わる看護師として成長していました。この研究の間、改めて小児看護に携わる看護師に求められる役割の多さと、力強く成長していく姿に尊敬の念を抱きました。

この研究を基礎として、現在、「子ども権利擁護実践能力尺度」を開発し今年度学会で発表いたしました。加えて、科学研究費助成を得て、「子どもに携わる医療者の子どもの権利擁護実践能力を高める教育プログラム」の作成に取り組んでおります。これらの研究結果を活用していただくことによって、子どもに携わる看護師の子どもの権利擁護実践に役立てて頂きたいと考えております。

最後に研究のご指導をいただきました、東京女子医科大学の日沼千尋先生、当時上司として見守っていただきました濱中喜代先生に感謝申し上げます。

これからも学会に貢献しつつ、研究教育に精進してまいりますので、よろしくお願いたします。





「リレートーク」 齋藤 依子さん

自己紹介

長野県立こども病院の齋藤依子と申します。

自然豊かな長野県安曇野で生まれ育ちました。実家は農家で、遊び場は田んぼと近くを流れる川(せぎ)でした。看護学校へ進学し、そこでは勉強のことより、寮生活での諸々の楽しく懐かしい思い出が思い浮かびます。看護師となり国立病院に10年間勤務した時に、安曇野に新しくこども病院が開院するということで、長野県立こども病院に入職し現在に至っています。2011年から、副院長兼看護部長の役割を担っておりますが、臨床一筋の人間です。

看護師になったきっかけ

「子どもの時から看護師を目指して…」というわけではなく、子どもの頃は「学校の先生になりたい」と思っていました。高校で進学先を決める時に、看護師という職業を選択しました。将来の職業を考えた時、周りを見渡すと親族や親戚に医療関係者が多く、医師、看護師、薬剤師、放射線技師…病院ができるんじゃない?と思わせる状況があり、今思えば医療の道に進むレールが敷かれていたように思います。

新人時代の思い出

新人時代を過ごしたのは大人の外科病棟です。希望して配属になりました。先輩や同僚に恵まれ、楽しい新人時代を過ごしました。先輩たちは、仕事のことは勿論ですが、仕事以外での楽しみ方もたくさん教えてくれました。私たちが新人の頃は、今のような新人教育の体制が整っていた時代ではなく、そんな中でも、手術がメインの外科と脳外科の病棟で2人夜勤を行っていたのですから、先輩がかなりフォローして面倒をみてくださっていたのでしょう。自分ができないなんて思うこともなく、何と怖い者しらずだったことか。そう思わせないように支援してくれた先輩方に感謝です。

小児看護の魅力

私が小児看護に携わるようになったのは、看護師として働き始めて8年目。その間に2人の子供を出産し、院内の異動で小児科病棟に配属になりました。総合病院の小児科病棟で約3年間、小児看護を経験しました。未熟児室も小児科病棟にあったので、新生児の看護も経験することができました。その経験があったので、今のこども病院が開院する時に、専門病院で仕事をやってみようと思断できたのだと思います。小児看護の魅力は、子ども達の成長や生命力の強さを実感できることは勿論のことですが、ひとりひとりの子ども達を取り巻く家族の思いや家族形態が違う中で、家族の一員として存在し、その形ができていく過程に携われることです。



ちるくまと一緒に

ストレス解消法

「ストレスを溜めこまない」と言うか、あまり溜りません。職場から離れて、いつもと違う非日常的な生活を送ることが、一番のストレス解消法です。プライベートで旅行にも行きますが、仕事であっちこっちに出張する機会も多く、それも気分転換になっています。病院から離れたいだけかもしれません。

後輩達に期待すること

今の時代だからこそ、コミュニケーションの大切さを実感しています。相手のことを思慮深く思い、自分の考えを自分の言葉で話ができる、そんな人としての成長を期待しています。そして、ひとりひとりの子ども達を取り巻く家族の思いや家族の状況を理解することを大切に、家族の一員としての子ども達を支援していってほしいと思います。

バトンを受けて欲しい人  三輪 富士代さん

● 委員会活動報告 教育委員会 ● 委員長：勝田 仁美 ● 委員：二宮 啓子、友田 尋子、濱田 米紀、河俣 あゆみ

2018年度 日本小児看護学会地方会(九州・沖縄地区)開催報告

教育委員会で毎年開催しています地方会のご報告をさせていただきます。

今年度は九州・沖縄地区で開催されました。

日本小児看護学会教育委員会・倫理委員会共催

テーマ：みんなで創る臨床倫理カンファレンス

大会長：三宅玉恵(宮崎県立看護大学)

開催日時：8月25日(土)10時～12時50分

開催場所：宮崎県立看護大学 教育研究棟1F

開催概要：

倫理委員会の活動紹介と、「小児看護の日常的な臨床場面での倫理的課題に関する指針」・「子どものエンド オブ ライフケア指針」の紹介がありました。その後、グループワークにあたり、NICU事例・がん事例・運動失調症事例の3事例についてグループを3つに分けてディスカッションし全体討議がされました。

参加者数：会員32名、非会員15名、学生(院生含む)17名の計64名(関係者含む)アンケート結果(回収率：78%)

アンケート内容は、①子どもの臨床倫理について、学びを得ることができたか、②カンファレンスに参加して子どもと家族への看護を考えて

いくための臨床における倫理的な課題が見えたか、③カンファレンスを通して、学びを得ることができたか、④時間配分は適切か、⑤運営方法は適切か、⑥「小児看護の日常的な臨床場面での倫理的課題に関する指針」についての自由記載、⑥日本小児看護学会、教育委員会・倫理委員会について意見・要望で、①から⑤については、「とてもそう思う」と多数の回答が得られました。自由記載では、<臨床倫理についての学び>として、「子どもの病気を知る権利という前に、生活の充実に支援することや、子どもの思いを両親に知ってもらう機会をつくること」、「両親のそれぞれの思いを表出する機会をもつことが大切だと学んだ」、<臨床における倫理的課題>では、「進行性の病気に対する告知は必ずしも必要ではなく、その時その時の状況を子どもと考えていく姿勢が必要。答えではなく応える」「子どもを主体にする重要性」「倫理はゆるしである。寛容さが大切」等でした。

子どもや家族に日々関わる方々が、倫理的課題を感じた際にはチームで話し合いながら子どもにとっての最善を考えた看護を提供できると良いかと願っています。



委員会活動紹介

診療報酬検討委員会

- 診療報酬委員会
- 委員長：添田 啓子 ● 副委員長：日沼 千尋
- 委員：西田 志穂、古谷 佳由理、梶原 厚子、荻原 綾子、櫻井 育穂

診療報酬検討委員会は、小児看護および小児医療に関して診療報酬等の経済的保障の面から、現状を改善する要望書の作成や調査活動、会員への診療報酬に関する情報提供と啓発活動を行っています。平成30年度の活動をご紹介します。

1. テーマセッション「平成30年診療報酬改定は小児看護にどのような影響を与えるか」

平成30年診療報酬改定は、こどもから大人まで継続した地域包括システムの構築を目指した診療報酬・介護報酬の改定で、小児看護にかかわる改定が多くありました。この改定内容を知り活用いただくため、第28回日本小児看護学会学術集会では、テーマセッション「平成30年診療報酬改定は小児看護にどのような影響を与えるか」を行いました。プログラムは、1. 診療報酬検討委員会の活動(診療報酬検討委員会日沼千尋副委員長)、2. 平成30年診療報酬改定のポイント(診療報酬検討委員会西田志穂委員)、3. 医療現場がどう変わるか(済生会横浜市東部病院看護部長・小児看護CNS渡邊輝子氏)、4. 在宅の現場がどう変わるか(伊東市民病院主任小児看護CNS上原章江氏)にお話しいただき、わかりやすかったと好評を得ました。テーマセッション時の資料は、学会HPに掲載しました。ぜひご覧ください。

<http://jschn.umin.ac.jp/files/20180816shinryohosyu01.pdf>

2. 2020診療報酬改定要望書作成のための調査「小児看護にかかわる平成30年診療報酬改定および2020年改定に向けたニーズ」

次期診療報酬改定要望書の作成準備のため、現在、調査の準備を進めています。12月中には、全国の小児医療施設の看護部長様宛に調査用紙をお届けします。平成30年診療報酬改定の入院時支援加算、入退院支援加算、小児科療養指導料の算定状況(小児科医以外の医療従事者が指導を行った場合も算定可能)、これらの算定の工夫、次期診療報酬改定の要望などを調査します。また、質問紙調査後、算定の工夫をされている施設にヒアリングをさせていただきたいと考えています。ぜひ、調査にご協力いただけますようお願いいたします。



テーマセッションの様子
(診療報酬検討委員会委員長 添田啓子)

助成金公募のご案内

～”研究助成””国際学術会議研究発表助成”～

- 学術・研究推進委員会
- 委員長：榎木野 裕美
- 委員：内 正子、泊 佑子、小野 智美、中谷 扶美、長田 暁子、岡崎 裕子

日本小児看護学会では、小児看護の実践・教育に関する調査・研究を奨励し、サポートしていくために研究助成、国際学術会議研究発表助成の制度があります。

会員の皆様には、研究助成制度を活用し、調査・研究を進めていただきたいと願っています。研究助成の詳細は是非ホームページをご覧ください。

”研究助成”を受けられた学会員Aさんにお話を伺いました。「自分の研究は、研究助成を受けられる研究なのか、まとめることができるか不安で応募には迷いましたが、思い切って申請しました。委員会から申請の研究計画書の助言をもらったり、実際の助成金使用の仕方、会計報告など分からないときにはその都度相談し、研究に必要な資料や物品、交通費等に活用しました。助成を受けているのだから、と責任のようなものも感じたりしましたが、必ずまとめようと励みになったと思います。臨床で研究をするのは難しいですが子どものケアのため

に研究は必要です。なので、研究助成に応募してみようかなと思っています。」

“研究助成”では、助成対象になるテーマは、小児看護活動や業務に関する研究、実践の新しい取り組みに関する研究などの小児看護実践に根差したもので、助成対象者は小児看護実践者を優先しています。

“国際学術会議研究発表助成”では、国際学術会議で研究成果を世界に発信したり、様々な国の小児看護実践者・教育者と交流をもち学会員の見聞を広めていただきたいと考えています。

いずれの研究助成も1件10万円程度、年間2件の助成をしています。応募締め切りは、“研究助成”11月末、“国際学術会議研究発表助成”4月末・11月末、年間3件です。

学会員の皆様、ご応募をお待ちしております。また応募のご相談、ご質問等は学術・研究推進委員会までお問い合わせください。

日本小児看護学会 第29回学術集会ご案内

学術集会テーマ：小児看護の知を国際支援へ

- 【会 期】2019年8月3日(土)～4日(日)
【会 場】ロイトン札幌(札幌市中央区)
【一般演題・テーマセッション募集期間】2019年1月10日(木)～2月16日(土)
【事前参加登録期間】2019年1月10日(木)～5月24日(金)
【参加費用】会 員(事前)：10,000円、会 員(当日)：12,000円 / 非会員(事前)：12,000円、非会員(当日)：14,000円
※非会員の参加費には消費税が含まれます。

【プログラム】

- 会 長 講 演：「小児看護の知を国際支援へ」
松浦 和代 氏 (札幌市立大学看護学部 教授)
特別講演1：「伝えるのは命・つなぐのは命」
坂東 元 氏 (旭山動物園 園長)
シンポジウム：「国際交流を通じて結実する小児看護の知 日本-モンゴル発育性股関節脱臼予防プロジェクトから」
教育講演1：「子どもの発達を世界の実情からみつめる」
川田 学 氏 (北海道大学大学院教育学研究院 准教授)
教育講演2：「看護の国際支援から国際連携へ」
スーディ 神崎 和代 氏 (いわき明星大学看護学部 教授)
親の会との協働企画：検討中
一般演題(口演・示説)、テーマセッション(一般・理事会企画等)、学術集会企画等

【第29回学術集会 URL】<http://procomu.jp/jschn2019/>

【学術集会事務局】札幌市立大学看護学部

〒060-0011 札幌市中央区北11条西13丁目

【運 営 事 務 局】株式会社プロコムインターナショナル 札幌支社

〒060-0042 札幌市中央区大通西11丁目4番地 大通藤井ビル5階50

E-mail: jschn29@procomu.jp Tel: 011-272-5234 Fax: 011-272-5235

◆ 会員の皆様へ ◆

- 委員長：塩飽 仁
- 委員：有田 直子、荒木 暁子、新家 一輝、水野 芳子、相墨 生恵、井上 由紀子、小川 純子、金泉 志保美、今田 志保、今野 美紀、三国 久美、入江 亘、菅原 明子

より迅速かつ適格に投稿・査読を行うために、2018年10月28日付で学会誌投稿規程、投稿論文チェックリストおよび査読ガイドラインを改訂いたしました。詳細は学会ホームページでご確認ください。その要点をお知らせいたします。

【投稿規定】【査読ガイドライン】修正後に再投稿する場合、これまで編集委員会が定めた期限までに提出されなくても、3か月まで再投稿が猶予されましたが、査読期間が大幅に伸びるため、定めた期日までに再投稿されない場合は、投稿を取り下げたものとして扱うことにいたしました。再投稿の期限延長をご希望の場合は、理由と共に延長希望期日を編集委員会宛にお知らせください。

【チェックリスト】初回投稿時のチェックでは9割以上の原稿で修正が必要であったため、特にご留意いただきたい次の項目について改訂いたしました。

- ・倫理審査委員会名、承認番号を本文中に記載しない
- ・倫理審査委員会の承認については「所属大学」「A大学」と記載しない
- ・利益相反については、該当・非該当の旨を例文に準じて論文に記載する
- ・謝辞の個人や機関が特定できる文字を隠す処理を行う
- ・ページ毎に1～20までの行番号を挿入する
- ・原稿および査読者への回答に、著者が明らかになる情報(氏名・所属など)を記載しない

今後も投稿と査読が適切に行われるよう、適宜規程等を見直してまいります。会員の皆様のご投稿と査読へのご協力をお願い申し上げます。

広報委員会メンバー ●委員長：江本 リナ ●委 員：上別府 圭子、西田 みゆき、安田 恵美子、吉野 純、鶴巻 香奈子